

和泉の古代寺院 — 南海道の古代寺院 —

寺 園 洋

甲子園（西宮市／摂津国武庫郡）に住んでいると、和泉国が遠く感じるのは閑空しか馴染みないせいだろうか。和泉の古代寺院を歩いたので紹介します。

和泉には古代寺院あるいは古代寺院の存在を推定させる遺物を出土した遺跡が28ヶ所あり〔[泉南市2005](#)〕、古代寺院の密度が濃い地域である。渡来系氏族も多く居住していた。

大阪府の湾岸地域になる和泉国は奈良時代に河内から分離して立国された。霊龜2年（716）、河内から大鳥・和泉・日根（ひね）の3郡を割き、「和泉監（いすみげん）」という特別行政区域になったが、天平12年（740）に河内に再統合され、さらに、天平宝字元年（757）に「和泉国」として成立している。

和泉には南海道という古代の幹線道路が通過していた。南海道は藤原京・平城京などから紀伊へのコースと、淡路・四国へと向かう2ルートがあり、古代寺院は幹線道路沿いに多く立地する。



秦廃寺出土の
豊浦寺式軒丸瓦
〔秦廃寺B〕

□『播磨国風土記』にみる和泉との交通

播磨と和泉に交流があったことが「風土記」に記される。揖保郡（いひほのこほり）越部里（こしべのさと）の記事には、「川内（かふち）国、泉（いづみ）郡から移住してきた別君玉手（わけのみみたまた）等の遠祖（とほつおや）」が登場する。和泉の本来の呼称は「泉」の一字で、「和」は飾り（好字に改名した）。泉郡は現在の行政区域では、おおよそ和泉大津市・和泉市・岸和田市・貝塚市になる。越部里の比定地は、たつの市新宮町周辺で、揖保川中流域になる。

さらにもう一件。讃容郡（さよのこほり）中川里（なかつがはのさと）の里人が「**河内国免寸（とのき）の村の人****が持つ剣を買った**」という記事もある。免寸は高石市富木（とのき）が遺称地で、式内・等乃伎（とのき）神社もある（和泉国大鳥郡）。中川里は千種（ちぐさ）川の中流域（旧佐用郡三日月町）。藤原京・大官大寺の調査では、「**讃用郡驛里 鉄十連**」という木簡が出土しており、この「驛里」は中川里に比定されている。

揖保郡越部里・讃容郡中川里は古代山陽道から分岐する支路、美作（みまさか）道のルートに位置する。

□ 芦屋（葦屋）と和泉の往来

古代の芦屋（現在の神戸市東部も含む）と和泉も人の移住・交流があった。葦屋漢人（あしやのあやひと）の管掌者、百済系・葦屋村主（すぐり）の本貫が和泉である『新撰姓氏録（しんせんしょうじろく）』和泉諸蕃。

「萬葉集」のよく知られた悲劇、葦屋の菟原處女（うなひをとめ）をめぐる三角関係の男の一方は、千沼壯士（ちぬおとこ）あるいは小竹田（しのだ）壯士というが、千沼（血沼・茅渟など）も小竹田（信太）も和泉の地名である（葦屋まで舟で通ったのであろうか？）。

はたはいし 貝塚市半田町／和泉郡木嶋郷
■秦廃寺

秦廃寺址へは、ＪＲ阪和線・東貝塚駅で下り、東南方向に数分歩くと府営住宅が見える。府営住宅の北側一帯が寺域推定地になるが、地表に廃寺の痕跡は皆無。

津田川左岸に立地し、古代南海道の通過地は明らかでないが、熊野街道沿いである。

秦廃寺周辺には「秦」関連地名が多くみられる。現在は半田と表記するが、かつて秦村だった。津田川沿いには式内・波多(はた)神社(岸和田市畑町)、式内・矢代寸(やしろき)神社(祭神：波多八代宿禰 岸和田市八田(はった)町)、それに太田の地名が残る。太田はミヤケ(屯倉・三宅)関連地名であり、秦氏による津田川流域の開発(ミヤケ)を想定できる。

□和泉秦寺について

京都太秦(うづまさ)の広隆寺は秦河勝が創建したと伝えられ、国宝・弥勒菩薩半跏像(宝冠弥勒)はよく知られる。広隆寺には『広隆寺末寺并別院記』という写本が伝わり、そこに「和泉秦寺」が記載される。

「和泉秦寺」は別名を木嶋寺・薬師寺とも記され、所在地は和泉国和泉郡、建立者は勝賀佐枝（すぐりのかさえ）等、建立時期は天武10年（681）とある。

写本の成立はかなり新しいものであり、創建者とされる人物が他の史料では確認できないという制約もあるが、①『新撰姓氏録』和泉諸蕃に、「秦勝（はたのすぐり）」が確認できること、②木嶋寺という別名と木嶋郷、③秦廃寺周辺に残る地名から津田川流域は秦氏の拠点であったと考えられることなどから、秦廃寺は「末寺帳」に記される和泉秦寺であろう、と推測される。秦勝・勝氏は数多い秦氏の同族の一派である。

ちなみに、前号（273号）で取上げた和久寺（わくでら）**廃寺**（福知山市／丹波国天田郡）も「末寺帳」に記載される「江林寺」と考えられている。

□秦廃寺の遺構・遺物

秦廃寺の調査は、推定寺域周辺の府営住宅建築などで行われているが、寺院の遺構（建物址など）は確認されていない。従って伽藍配置も不明。

寺域については、参道と考えられる南北道や寺域南限の段が確認されており、周辺に残る小字名と併せて

一町四方と推定されている。寺域南側に寺院建立に伴う工人の集落が存在する[奥村・城野2006]。

□軒丸(のきまる)瓦

出土瓦は大きく3型式あり、それぞれ祖型となる瓦の出土寺院を名称にして、①豊浦(とゆら)寺式、②紀寺(小山廃寺)式、③池田寺式と呼ばれる。

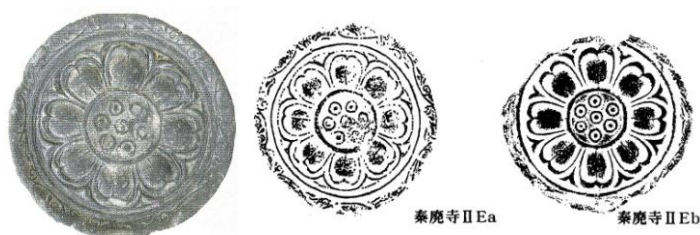
① 出土した豊浦寺式軒丸瓦は、いわゆる「高句麗系」であり、飛鳥豊浦寺の塔に使われた可能性が高いと考えられている。二種(秦廃寺A・B)出土し、うち秦廃寺Aは「豊浦寺ⅦA型式」と同範(同じ木型を使用する)である。つまり、豊浦寺と秦廃寺の建立集団は浅からぬ因縁がある。和泉地域最古の軒丸瓦であるが、出土数が少なく、建物があっても仏堂程度かとも推測される。瓦の推定年代は7世紀第2四半期。



「高句麗系」と呼ばれる瓦は高句麗から直接影響を受けたものだけではなく、新羅でも類例が見られ、また、日本でその文様が新たに創案、変化している。

② 紀寺(小山廃寺)式軒丸瓦の時期は、7世紀末～8世紀初頭とされる。最も多く出土しており、本格的な伽藍はこの時期に整ったとも考えられている。

③ 池田寺跡(和泉市/和泉郡池田郷)から出土する軒丸瓦のうち、「池田寺Ⅱ式」に分類されるもので、外縁(周縁)に「唐草文」がめぐる。一見して、新羅系とされる文様である。瓦の年代は8世紀前半。



秦廃寺出土の池田寺Ⅱ式軒丸瓦

池田寺Ⅱ式軒丸瓦は、「丸みのある蓮弁を輪郭線と間弁が二重に囲むあり方、唐草文を周囲にめぐらす軒丸瓦は、統一新羅の瓦に類似するものが認められる」と指摘される。

慶州霊廟寺址出土 蓮花文圓瓦當

慶州博物館の図録『新羅瓦磚』を見ると類例はあるが、新羅でも主流をなす文様ではないようである。

以上のように、秦廃寺は「広隆寺末寺帳」記載の和泉秦寺と考えられること、周辺に残る秦氏関連地名、



高句麗系・新羅系とされ、渡来系氏族と関連することの多い文様の採用、周辺地域における軒丸瓦文様の共有(ネットワーク)などから、秦勝氏が主導し建立した「知識による寺院(知識寺院)」と考えられる。

□豊浦寺(日本最初の尼寺)と秦氏

豊浦寺は播磨とも関係あり、和泉ではないが取上げる。秦廃寺は豊浦寺と同範の軒丸瓦を使っているが、むしろ豊浦寺の建立が先行する。豊浦寺は蘇我本宗家により飛鳥寺(平城京へ移り元興寺)に続き、日本で2番目に造られた本格的寺院で最初の尼寺。

豊浦寺の「高句麗系」軒丸瓦は4種(Ⅳ～Ⅶ型式)あり、うちⅣ型式は、秦氏が経営した宇治の隼上(はやあがり)瓦窯で焼かれている。瓦からみると、豊浦寺の造営には秦氏も関与している。さらに、豊浦寺の瓦を焼いた瓦窯も和泉地域に存在したのではないかと推定されている。津田川流域ではなかろうか?

□豊浦寺と播磨

i) 豊浦寺の尼僧は、「播磨に住む高麗(こま)の還俗僧(げんそくそう) 恵便(えべん)」により得度・剃髪された[『日本書紀』敏達13年(584)]。『元興寺(かんこうじ)縁起』では、「脱衣の高麗の老比丘(びく)、名は恵便」と「老比丘尼(びくに)、名は法明」が「針間の国」から迎えられ、三人の女(むすめ)を得度させている。「紀」の編者はこの年の一連の動きを、「佛法の初(はじめ)、これより作(おこ)れり」と特筆している。

ちなみに、三人の女はすべて渡来系氏族(鞍部村主(くらつくりのすぐり) 司馬達等・漢人夜菩・錦織(にしこり) 壺)の女だった(テニスの錦織さんは百済系?)。

播磨の高麗(高句麗)人・仏教

これらの史料から、播磨(針間)に高句麗人が住んでいたことが確認できる。単独では生活できないので、恵便・法明の周囲には渡来系集団が居住しており、彼らは中央の仏教公伝(538年)とは関係なく、播磨の地で仏教を信仰していたのであろう。播磨に古代寺院が多く造られた背景には、このように早く仏教を受け入れた渡来系氏族・集団の存在が考えられる。

ii) 播磨の高丘窯(明石市)で焼いた船橋廃寺式軒丸瓦が豊浦寺に送られている(豊浦寺ⅢE型式)。→ 明石から飛鳥までは直線距離で約80kmある。

(仮称) 邑美(おうみ) ミヤケ

高丘窯の存在は、①明石川流域の西岸、赤根川流域に蘇我系の氏族・集団(今来漢人(いまきのあやひと)・今来漢陶部(すえつくりべ) だろうか)が勢力を扶植していたこと、②ミヤケの存在を推測させる。和泉の津田川流域の状況と共通する。赤根川河口は「行基五泊」の一つ魚住泊で瀬戸内海航路の拠点であり、赤根川・金ヶ崎窯は渡来系要素が濃厚な窯跡である。

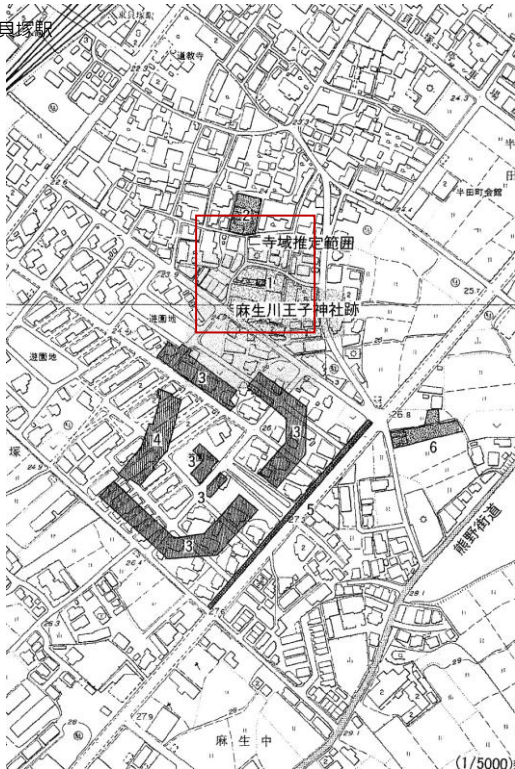
*引用・参考文献はむくげの会HPを参照して下さい。



■引用・参考文献

大阪府教育委員会 2000『秦廃寺』

JR東員駅



編集:清水昭博 檀原考古学研究所附属博物館 1999
『蓮華百相—瓦からみた初期寺院の成立と展開—』



秦廃寺A（豊浦寺ⅦA型式）



秦廃寺B（豊浦寺ⅦA型式と同文）

和泉市教育委員会 2005『てら・ひと・かわら
— 瓦から探る和泉の古代寺院展 —』

奥村宏美 2006「和泉地域の軒瓦と古代寺院」

城野博文 2006「泉南の古代寺院」

『古代和泉郡の歴史的展開』和泉市紀要第11集

上田 睦 1997「河内・和泉の寺院と古墳」『季刊考古学
渡来系氏族の古墳と寺院』60 雄山閣出版

上田 睦 2000「摂河泉の高句麗系軒丸瓦
—河内を中心として—」

花谷 浩 2000「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」

2000「豊浦寺の高句麗系軒丸瓦」

『古代瓦研究Ⅰ』奈良国立文化財研究所

菱田哲郎 2002「秦氏の寺とそのネットワーク」

『京都と京街道』吉川弘文館

梶原義実 2010「古代寺院と行基集團—和泉地域におけ
る奈良時代寺院の動向と「行基四十九院」—」

『名古屋大学文学部研究論集 史学』56

金 誠 龜 1995「古代日本の新羅系軒丸瓦について」

『青丘学術論集』第6集 韓国文化研究振興財団



25 慶州西岳洞



99 佐賀寺浦廃寺

*外縁に唐草文 金誠龜氏が挙げられた類例

金誠龜・訳:寺岡洋 2009「統一新羅時代の瓦埴研究」
『東アジア瓦研究』第1号 東アジア瓦研究会

国立慶州博物館 2000『新羅瓦埴』図298 p94

倉吉市教育委員会 1999『大原廃寺 発掘調査報告書』

寺岡 洋 2015「伯耆四王寺と山陰道の古代寺院」

『むくげ通信』273 むくげの会

*外縁の唐草文は前号（273号）で紹介した
大原廃寺（倉吉市／伯耆）でも見られる。

VII類

